台大日本語文研究第 14 期
2007 年 12 月，頁 239-266
本文 2007-1120 收稿，2007-1221 通過刊登

有關芥川龍之介「南京的基督」的考察
故事的轉換與接受之間

張宜樺*

摘要

大正九(1920)年七月，刊載在『中央公論』雜誌上的「南京的基督」這篇小說，是以芥川寫作當時同時代的中國秦淮地區爲背景，主角是一名信仰基督教的 15 歲年輕私娼。這篇小說正逢芥川在多方面嘗試其新創意的時期，然而，當時的文壇評論雖然在創作技巧層面，對「南京的基督」有相當高的評價，卻在內容方面持否定的意見。特別值得一提的是南部修太郎的評論，因爲，芥川曾以私人書信回應南部的評論。芥川過世後，這兩封書信被公開，芥川在創作「南京的基督」時所投入的創作意圖也因此得以明朗化，而大幅改變了對該作品的解讀方式。因此，對芥川那兩封書信加以探究自不需多言，然而，迫使芥川不得不以書信回應的南部之評論內容，亦有再檢討的必要性。由此，或許能闡明「南京的基督」中原本所潛伏著的問題點。本論文企圖在依據文本探究該作品之結構的同時，亦將當時的評論與那兩封書信所言及的內容予以核對並加省思。

關鍵詞：芥川龍之介、南京的基督、中國、基督教。

* 慶應義塾大學研究所博士生。

A Consideration of Ryunosuke Akutagawa's "Christ in Nanjing"

Chang IFa*

Abstract

Ryunosuke Akutagawa's "Christ of Nanjing" which carried by "Chuo Koron" in July 1920, assumed then China a background. And a young prostitute of 15 years old who believes in Christianity is a chief character. It was the time when Akutagawa tried ambitious creation. "Christ of Nanjing" was evaluated for the creation method highly, but there were many negative opinions for the contents. Akutagawa wrote two letters and protested the criticism of Nanbu Shutaro. Two letters were announced after Akutagawa died, and the way of reading of "Christ of Nanjing" turned a lot. Therefore I want to reexamine the two letters and the criticism that angered Akutagawa. I think that there is an opportunity elucidating problems of "Christ of Nanjing" there. The main subject analyzes the structure of the work from the text and wants to ascertain the contents that the criticism in question and two letters mentioned.

Key words: Ryunosuke Akutagawa, "Christ in Nanjing", China, Christianity.

* Ph.D.program graduate student, Keio University.

芥川龍之介「南京の基督」の考察
――「話」の転換とその受容をめぐって――

張宜樺*

要旨

大正九（1920）年七月、「中央公論」に掲載された「南京の基督」は、同時代と思われる支那の秦淮を舞台に、基督教を信仰する「十五歳の私窩子」を主人公とする作品である。時は、芥川が野心的な試みをめぐらし、文壇もそれに着目した時期で、「南京の基督」は創作技巧の面で高く評価されるものの、内容の面では否定的な評価が多かった。殊に南部修太郎の評論に芥川が私的な書簡で応酬していた事実は重要で、芥川没後にそれらが公表されるや、「南京の基督」の読みは大きく変わり、徐々に定着するようになる。そこで、その二通の書簡は当然のこと、書簡を認めさせた同時代評にも改めて目を向け、再検討すべきではないかと考えた。両者の間に横たわるズレにこそ、「南京の基督」に本来潜伏していた問題点を解き明かす可能性があるのではないかと思うからである。本論では、テクストに沿って〈読み〉を繰り広げていくとともに、同時代評と二通の書簡の言及する箇所を重点に見詰め直して、作品の持ち合わせている問題の解明に努めていきたい。

キーワード：芥川龍之介・南京の基督・支那・基督教。

* 慶應義塾大学大学院文学研究科、後期博士課程。

芥川龍之介「南京の基督」の考察
――「話」の転換とその受容をめぐって――

張宜樺

一、はじめに：

大阪毎日新聞社の海外視察員として中国を旅行する（大正十（1921）年三～七月）より半年以上も前に遡る大正九（1920）年七月に、「昔」の中国を舞台とした童話「杜子春」（「赤い鳥」）と時を同じにして、「南京の基督」は「中央公論」に掲載された。

中国を舞台とした「現代物的な切支丹物の一作」[1]と言われていることからも分かるように、「南京の基督」は、場を中国に求め、支那人を主人公とした所謂中国関連の作品でもあり、「秋」（「中央公論」大正九年四月）から始まった「現代物」の試みの一つであり、基督教を扱っていることから「切支丹物」および「聖なる愚人」の系譜にも組み込むことができる。要するに、「中国物」「現代物」「切支丹物」と、幾つもの性質を持ち合わせている「南京の基督」は、扱われる要素の如何によってその位置付けも変異する作品なのである。

先も言及した通り、中国旅行の実現は「南京の基督」を執筆した七ヶ月後だが、中国旅行の話はすでに大正八（1919）年の七月の段階で新聞にも取り上げられていた[2]。第一次世界大戦後、新聞社は文壇作家を特派員として海外に出張させて紀行文などを書かせるという風潮があり[3]、日本社会一般にも紀行文を通して、「民間による文化的な交流の中で中国の〈本当の姿〉を知ろうという、中国に対する見方の一連の変化が起き」[4]ていたようである。

---

1 河泰厚(1997)「「南京の基督」考察」、「日本文学研究」32、p93-103、梅光学院大学日本文学会。

2 記事（1919/7/13)「芥川龍之介氏本年９月頃支那へ旅行すべし」、「東京日日新聞」。記事（1919/7/27)「芥川龍之介氏　来春桃の咲く頃支那漫遊に出発揚子江を溯航する」、「時事新報」。

3 関口安義（1997・2)「海外特派員」、『特派員　芥川龍之介―中国でなにを視たのか―』、p66-70、毎日新聞社。

4 西山康一（2002・5-6)「「幻想」／「迷信」としての〈中国〉―芥川龍之介「南京の基督」における〈科学〉と〈帝国主義〉」、「文学」３、p196-214、岩波書

芥川本人はというと、「大正八年に文筆業に専念すべく生活を切り替え」、「新しい自身の文学の可能性を求めて、野心的な試み」[5]をめぐらしていたことは、よく知られている。その「野心的な試み」の一つで、高い評価を得た「秋」を脱稿した翌月には、長男比呂志が誕生し、芥川が安定した生活に身を置いていた時期だとされる一方で、教職と創作の二重生活から脱して生活を整理したにもかかわらず、「社員になる前の作品の方が佳作だつた」（宮坂）ことから、創作の行き詰まりも伺わせていた。また、遺書[6]における告白から、中国旅行がまだ実現を見ることが出来なかった頃、芥川は秀しげ子との関係に苦悩していたことも明らかにされている。「南京の基督」を執筆する芥川の生活環境を肯定するにしろ、否定するにせよ、新しい文学の可能性をその創作で試みたことだけは確かである。失敗作を多く見るが、今日まで多くの佳作を残すことが出来たことを考慮に入れると、それも避けて通れぬ過程だったと言えよう。

ただ、多産でもあるこの時期に、必然的に臨まなければならなかったのが、他人による評価だった。私信で交わされる応酬ではあったが、後に公になる南部修太郎宛書簡から、「南京の基督」に対する同時代評に芥川が強い関心を寄せていたことは明らかである。

今日では堀辰雄の「彼の代表作の一つ」[7]という言葉が常に持ち上げられ、高く評価されるものの、その同時代評は比較的に厳しいものが、あたかも言い合わせたが如く、出揃っていた。

店。

5 宮坂覺（1976・2）「「南京の基督」論―金花の（仮構の生）に潜むもの」、「文芸と思想」40、p23-45、福岡女子大学文学部。

6 「僕は支那へ旅行するのを機会にやつと秀夫人の手を脱した。（僕は洛陽の客桟にストリントベリイの『痴人の懺悔』を読み、彼も亦僕のやうに情人に譴(ケン)を書いてゐるのを知り、苦笑したことを覚えてゐる。）その後は一指も触れたことはない。が、執拗に追ひかけられるのには常に迷惑を感じてゐた」。（小穴隆一宛遺書（1998・1）『芥川龍之介全集』第 23 巻、p84-87、岩波書店。）

7 堀辰雄（1978）「芥川龍之介論―芸術家としての彼を論ず」、『堀辰雄全集』第四巻、p559-609、筑摩書房。（昭和四年三月、東京帝国大学文学部国文學科を卒業するに際して提出された卒業論文。）

「作者の冴えた筆達者さは気持が好」（南部[8]）く、その「筆は細かい、手の入つた」（谷崎[9]）実に「巧に造られたお話」（安倍[10]）は、「例によって格を外さぬ文体の美しさ、大道具小道具衣装の排置のよさ、中に盛られた人生哲学の鳥渡した気のきゝ方、更に全篇を作す態度の一糸乱れない立派さ、所々を機智で救ふ（壊す場合もあるが）気禀の閃めき」など、「一として龍之介特色を恣まにせざるものはない」（久米[11]）というふうに、創作技巧の面では決して評価が低いわけではない。しかし、技巧面における「龍之介特色」が祟ってか、「折角「秋」で一転向を見せ」ながら、「又趣味ばかりで固めたメルヘンの領域へ後戻り」（久米）したと指摘されているように、「小綺麗に小器用に纏め上げた Fiction」（南部）で、「作者の漢文の素養や通を利用して美し」く「織成したに過ぎない」（安倍）物語だと、従来の作風から脱していないと見なされていた。作品の内部にあたっては、「如何にも嘘らしい事実を、如何にも嘘らしくなく」（南部）描き、「何だか御噺の單なる筋書見たやうで物足ら」（原田[12]）ず、「人間臭い食ひ入方」がないので「通俗小説以下に安易な世界だと思はれてならない」（久米）、と否定的である。

「興味あるテマではあるが、作者は必ずしもこのテマに力を集中するわけでもな」（安倍）く、「裏にある作者の「心の動き」が、どうも真の意味での材料への食ひ入り方が、何物かの為めに、（此処では作者の支那趣味、乃至は切支丹趣味といふやうなものゝ為めか。）沮害されてゐる」（久米）ようだと、「テマ」や「素材」は好いのだが、作者の意気込みや「心の動き」が感じられないというのが技巧と内容の評価の違いを生み出したとされる。のちに、「南京の基督」の〈読み〉を大きく左右することとなる南部修太郎宛書簡を芥川に

[8] 南部修太郎（1920/7/11）「月報「最近の創作を読む」」、「東京日日新聞」。
[9] 谷崎精二（1920/8/1）「七月の文壇」、「新潮」33 巻 2 号、p68-70。
[10] 安倍能成（1920/7/13）「七月の雑誌を見て」、「読売新聞」。
[11] 久米正雄（1920/7/14）「続七月の文壇―後戻りをした芥川氏と、熱さましの正宗氏―」、「時事新報」。
[12] 原田實（1920・8）「七月の文壇―僅かに讀んだものに就て―」、「早稲田文学」177、p61-64。

認めさせたのも、このような同時代評の中で語られていた「少々作者の遊びも薬が利き過ぎる」という南部修太郎による文句だった。

芥川の没後、南部修太郎宛の書簡が公表されたことにより、「南京の基督」に対する評価は、当然の如く変化する。今日では、三好行雄[13]を道標に、金花の病が完治したか潜伏期にあるのかという問題が必ずと言っていいほど論じられるのだが、書簡が公表された後の論評は、基本的に「氏のロマンチシズムに溢れてゐる私窩子の抱いているクリストの夢に―儚い夢に、氏は憐愍と愛撫」[14]を注ぎ、「彼の一つの重要な特色」である「人生に対する軽蔑に近い憐憫」などとあるように、作品背後にいる芥川龍之介の「憐愍（憐憫）」が見詰められるようになる。改めて南部修太郎宛書簡の影響力の大きさを思い知らされるわけだが、「南京の基督」を研究するにあたり、二通の書簡は当然のこと、書簡を認めさせた同時代評が語る内容についての再検討も必須なのではないかと考える。言葉や表現の仕方は違えども、申し合わせたかのような共通の傾向にこそ、芥川が書簡でもって本作品の弁護に当らざるを得なかった所以即ち「南京の基督」に本来潜伏していた問題点を解き明かし、その本質に迫る鍵があるのではないかと思うからである。

以下、同時代評と二通の書簡が言及していると思われる箇所に注意を払いながら、テクストを丁寧に〈読み〉解いていく。

二、第一章：「或秋の夜半」の出来事

> 或秋の夜半であつた。南京奇望街の或家の一間には、色の蒼ざめた支那の少女が一人、古びた卓の上に頬杖をついて、盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた。（傍

[13] 三好行雄（1971・1）「『南京の基督』に潜むもの」、「国語と国文学」48、p52-63、東京大学国語国文学会編、至文堂。
[14] 宮本顕治（1980・11）「「敗北の文学」―芥川龍之介氏の文学について―」『宮本顕治文芸評論撰集』第一巻、p3-32、新日本出版社。（初出は（1929・8）『改造』、改造社）。

線筆者、以下略す。）

上は「南京の基督」の冒頭である。〈時〉は「或秋の夜半」で、〈場〉は「南京希望街の或家の一間」、「陰鬱な効果を与へる」ランプの「うす暗い光」に照らし出された部屋の壁に懸かっている「稚拙な受難の基督」の十字架をじっと眺めている「支那の少女」こそ、この作品の主人公で、「名を宋金花と云つて、貧しい家計を助ける為に、夜々その部屋に客を迎へる、当年十五歳の私窩子」である。彼女は、「たつた一人の父親」に「酒を飽かせてやる事を楽しみに」する親孝行者で、その理由に「歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰」が挙げられるのだが、テクストの〈時〉は突如ここで

―さう云へば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があつた。

と、「今年の春」に切り替えられるのだった。冒頭の「或秋の夜半」というのが語り手の語る〈現在〉だとしたら、「若い日本の旅行家」が「金花の部屋」を訪れたのは、半年前だということになる。そして、「羅馬加特力教の信仰」で触発された〈「今年の春」の話〉は、「若い日本の旅行家」と金花の信仰をめぐる会話が中心となって繰り広げられていく。「耶蘇教徒」なのに「こんな商売をしてゐる」矛盾については「この商売をしなければ、阿父様も私も餓ゑ死をしてしま」うと、また、「こんな稼業をしてゐたのでは、天国に行かれないと思やしないか」という「若い日本の旅行家」の問いに、「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。―それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」と金花は答える。これらのやりとりから、金花の信仰の一端を少し垣間見ることができよう。「基督様」と「警察署の御役人」を対比していることから、私窩子である金花の生活を脅かす「警察署の御役人」に対し、金花の内の「基督様」は金花の生活を守るべき存在なのである。しかし、「かう云ふ確信に自ら安んじてゐた」金花に試練が訪れる。

所が彼是一月ばかり前から、この敬虔な私窩子は不幸にも、悪性の楊梅瘡を病む体になつた。

語りの〈時〉は「彼是一月ばかり前」に変わり、「敬虔な私窩子」である金花が「悪性の楊梅瘡」に罹り、朋輩たちが語り手からみて「迷信じみた療法」を金花に薦め、金花本人もその「言葉には多少の好奇心を動かしたと見え」たが、移された人間の行く末を知ると、「十字架の前に跪いて、受難の基督を仰ぎ見ながら」、「たとひ餓ゑ死をしても、（中略）御客と一つ寝台に寝ないやうに、心がけ」ると「決心」する。ところが、その一方では「私は女でございます。いつ何時どんな誘惑に陥らないものでもございません。天国にいらつしやる基督様。どうか私を御守り下さいまし。」と基督様へ「決心」を揺さぶる「誘惑」に負けないことを祈るのである。確かに、金花の祈祷文句だけだと、「〈守れ〉という祈りであって〈救え〉とのそれではない」[15]ように思えるが、その「御守り下さいまし」には、「救済を確認している」[16]嫌いがないとも言えない。

そして、金花が「決心」を実行すると共に、客足は遠退き、「彼女の家計も、一日毎に苦しくなつて行つた。……」と、「……」を置いて、語りの〈時〉はまた「今夜も彼女は」へと変わる。その「今夜」というのが、冒頭における「或秋の夜半」だということは容易に察しが付こう。冒頭から駆け足で見てきたが、「冒頭で、〈或秋の夜半〉という現在の金花の様子を描き、途中から金花の生い立ち、〈今年の春〉の〈若い日本の旅行家〉との対話、そして〈一月ばかり前から〉の病にまつわるエピソードを挿入して、再び現在に戻るという、巧みな手法を用いている」[17]ことが割り出せるとともに、ここに至って物語が実際は少しも動いていなかったことを改めて確認できよう。つまり、「〈今年の春〉の〈若い日本の旅行家〉との対話」

[15] 三好行雄、p112、前掲載論。
[16] 栗栖真人（1984・1）「芥川龍之介「南京の基督」論」、「別府大学紀要」25、p11-20、別府大学会。
[17] 高橋龍夫（1988・12）「『南京の基督』試論」、「稿本近代文学」11、p61-71、筑波大学日本文学会近代部会。

と「病にまつわるエピソード」は、実はすべて「或秋の夜半」の時点にいる金花像を形作るためのものだったのである。全集 18 頁の内、11 頁半を占める第一章のおよそ半分のここまでの 5 頁半は、結局は金花についての説明で終わっていたのである。

語られている〈現在〉である「或秋の夜半」は、「耳にはひる音と云つては、唯何処かで鳴いてゐる蟋蟀の声ばかり」の「更け渡つ」た夜だった。金花は「うす暗いランプの火に、さつきからうつとり見入つてゐた」が、「火の気のない部屋の寒さ」に「身震ひを一つ」し、「小さな欠伸を噛み殺」す様子は、「よく見ると実はあたかも催眠術の施術現場を思い起こさせ」[18]ている。「金花の部屋」は、まさに大正八年十一月には脱稿し、翌年一月に「赤い鳥」に掲載された童話「魔術」の中で、語り手の「私」が「高が進歩した催眠術に過ぎない」魔術を施された「うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋」に酷似している。しかし、その蟋蟀の声しか耳に入らない夜の静寂は泥酔した「見慣れない外国人」の出現で破られる。「西洋人か東洋人か、奇体にその見分けがつかな」い外国人が支那語を理解しないという設定は、のちの展開に必須なのだが、彼は「一方的に眼差される対象」、つまり「テクスト内に自らの〈物語〉をもつことができない」[19]存在として登場するのである。

招き入れもしないのに、「見慣れない外国人」のその「客」[20]は部屋の中の、金花の「卓の向うの椅子」に腰を下ろす。言葉が通じないにもかかわらず、談笑し合う二人だが、金花は「何やら意味のわからない滑な外国語」を耳にしながら、見慣れないはずの外国人の顔に「見覚えがあるやうな、一種の親しみを感じ出」す。一生懸命に記憶を手繰り寄せても、該当する人物が思い当たらない中、当

[18] 西山康一、p201、前掲載論。
[19] 五島慶一（2000・5）「『南京の基督』論―〈物語〉と語り手」、「日本近代文学」62、p57-69、日本近代文学会。
[20] 大凡において、金花の立場で語る時は「この外国人」、客観的に金花と外国人の挙動を述べる時は「客」というふうに、語り手は「外国人」と「客」の両方を使い分けている。

の外国人は「片手の指を二本延べ」出して、値段交渉を始めるのだった。意志疎通の叶わぬ苛立たしさに足踏みをし、頭を振る金花の拒否をよそに、「客」は「指の数を増し」ていく。その指の数を「一本づつ」増やしていく仕草からもまた催眠術をかける動作が想起されよう。そして、「かすかな金属の音を立て」て、金花の足下に落ちた十字架の「受難の基督の顔」が「外国人の顔と生き写し」だと気付いた瞬間、金花は完全に術中に嵌るのだった。視覚には「基督の顔」、嗅覚には吐き出された「パイプの煙」の臭い、そして、聴覚には「何やら笑ひ声の言葉」が「金花の心」に「殆ど巧妙な催眠術師が、被術者の耳に囁き聞かせる、暗示のよう」な作用を引き起こすのである。「健気な決心」を忘れてしまったかのような金花には、もはや「彼の接吻をはねつける」ことなどできるはずもない。

以上が第一章の内容となるが、この章は、客と床を共にしないと誓いながら、「催眠術の施術現場を思い起こさせ」る「金花の部屋」で、まるで催眠術にかかったが如く（十字架の受難の基督に似た）外国人に体を許してしまった〈「或秋の夜半」の出来事〉として締め括られる。しかし、改めて振り返って見てみると、〈「或秋の夜半」の出来事〉を出来事たらしめたのは、語り手が主観的に説明した金花の「生い立ち」・「日本人旅行家」との遣り取り・「病にまつわるエピソード」によって第一章の前半で構築された「敬虔な私窩子」という金花像だったことが再認識されよう。第一章で語られた〈「或秋の夜半」の出来事〉を出来事たらしめることができたのは、まさにその金花像だった。そして、その金花像によって意味付けられた〈「或秋の夜半」の出来事〉が、結果的に物語っているのは、金花が天国に行く資格を失くしたことに尽きるのではないだろうか。

三、第二章：金花の（奇蹟の）話

第二章は、その〈「或秋の夜半」の出来事〉の「数時間の後」へと〈時〉が進み、まるで具現しているかの如く、語り手によって「埃

じみた寝台の帷から、屋根の上にある星月夜へ、煙のやうに高高と昇つて行」った金花の「夢」が語り出される。「頬杖をついて、盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破」っていた、うす暗くて陰鬱な「金花の部屋」の時とは対照的に、「夢」の中の金花は、「天国の町にある、基督の家」で「紫檀の椅子に坐つて、卓の上に並んでゐる、さまざまな料理に箸をつけてゐ」た。「夢」とは言え、自分の処している状態に金花は何ら疑問を抱いていない。また、十字架の「受難の基督の顔」が「外国人の顔と生き写し」だった衝撃的な発見は忘れ去られたかの如く、頭の上に「三日月のやうな光の環」を掲げて「今夜彼女の部屋へ、泊りに来た男」を「あなた」と呼んでいる。要するに、金花は顔の酷似で「円光を頂いた外国人」を直接「基督様」と確信したわけではないということである。

続けて金花はその人物とどうにも理解し難い次の会話を交わす。

「まあ、お前だけお食べ。それを食べるとお前の病気が、今夜の内によくなるから。」

円光を頂いた外国人は、やはり水煙管を啣へた儘、無限の愛を含んだ微笑を洩らした。

「ではあなたは召上らないのでございますか。」

「私かい。私は支那料理は嫌ひだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ。」

南京の基督はかう云つたと思ふと、徐に紫檀の椅子を離れて、呆気にとられた金花の頬へ、後から優しい接吻を与へた。

卓の上の豪華な料理を食べると「病気が、今夜の内によくなる」と言われて、何故病気のことを知っているのかと疑わないばかりか、金花は当人に料理を勧めている。「円光を頂いた外国人」の方も、「まだ一度も、支那料理を食べた事」がないのに、「支那料理は嫌ひ」だと言っている。分析に窮する「夢」の内容だが、「円光を頂いた外国人」が自分から「耶蘇基督」だと名乗ると、金花が「呆気にとられ」

ていたことから、外国人はあくまで「基督様」に似ているが、決してその「基督様」ではないと金花が考えていたことが伺えよう。この時点で「円光を頂いた外国人」が「基督様」だと立証できる証拠は、その自白しかないが、傍線部分にあるように、一貫して客観的な立場に努めていた語り手まで加担して外国人を「南京の基督」と呼んでいる。金花にはそれを確かめるどころか、言葉を発する機会すら与えられぬまま、「優しい接吻」で元の「金花の部屋」即ち現実世界へと引き戻されてしまうのだった。

「金花の部屋」では、「未に眠い眼を開かな」い金花にスポットがあてられ、「天国の夢がさめ」ていながら、金花が眼を開けないのは、「夢の記憶に、うとうと心をさまよはせ」て、無意識の内に現実と向き合おうとしないからだと語り手によって示唆されている。しかし、「傍若無人な現実」を「意識に踏みこ」ませないことは到底不可能なことで、金花の脳裏に真っ先に浮かび上がったのは、「もしあの人に病気でも移したら、―」という彼女の言葉から察する通り、「誘惑」に負けて客と床を共にして「決心」を破り、「他人を不仕合せに」してしまったことだった。ところが、「今はもう明るくなつた寝台の中」という「現実」には自分以外に誰もいない。〈「或秋の夜半」の出来事〉が意味する「決心」の破綻、即ち金花が病を客に移してしまい、自ら天国へ行く資格を失ってしまったことを立証する「人」の影は見当たらないのである。そこで、金花は「ではあれも夢だつたかしら。」と疑うが、「すべてが昨夜の儘」で、例の「小さな真鍮の十字架」も卓の上の「西瓜の種の散らばった中」で「鈍い光を放つてゐ」た。「金花の部屋」の中の「現実」は、改めて〈「或秋の夜半」の出来事〉が「夢」でないことを裏付けたのである。「やっぱり夢ではなかつたのだ」と呟くなか、金花はいるべきはずの「あの外国人の不可解な行く方」を気にせずにはいられなかった。

そして、朝日が差込み、「残酷な位歴々と、あらゆる物の輪郭を描」き出している「現実」の中で、「帰つたのかしら」と尤も合理的な解釈を金花も受け入れようとしていた時、「彼女の体に起つた奇蹟」が

新たな答え―「あの人が基督様だつたのだ」―を導き出す。その答えに達するまでの過程で不可欠だったのが、まさに「夢」の存在である。「夢」の中で、「あの人」が「それを食べるとお前の病気が、今夜の内によくなる」と言ったとおりのことが「現実」世界で実現したからである。

以上が第二章までの内容である。「夢」と「現実」から成る第二章は、全集 18 頁の内、約第一章の半分の 5 頁しか占めていない。この第二章で、のちに金花の口から語られる「奇蹟」というのが、紛れもなくその「夢」によって支えられていたことが見て取れよう。「夢」の内容がなければ、たとえ病が治癒しても、陳山茶が教えた療法のことを思い出し、「奇蹟」は民間療法の効果に向けられ、病を「見慣れない外国人」に移してしまったという結論が割り出され、その外国人を「基督」だと確信するに至らないばかりか、天国に行けなくなったことを悔やむことになったことだろう。

また、構造的な視点から言うと、この第二章で、第一章における〈「或秋の夜半」の出来事〉が、その翌朝の「夢」と「現実」で成立した〈奇蹟〉に包み込まれ、新たに金花を中心とした〈金花の（奇蹟の）話〉、つまり、ひと回り大きな一つの「話」に外側から覆われ、全体の「話」の位相を変移させていたことが見て取れよう。

四、第三章：「話」の相対化

南部修太郎[21]は同時代評でもあるその月評[22]で、「南京の基督」の梗概を指して、「支那の或る年若な売笑婦が梅毒に罹つてゐる。それが、彼女の信仰してゐる基督によく似た西洋人に肌身を任せる事に

[21] 南部修太郎（1892-1936）：小説家。宮城県の生まれ、慶大文学科卒。在学中から「三田文学」に翻訳や小品を載せ、卒業後同誌の編集に携わりながら創作に励み、「夜行列車の客」「猫又先生」などを書く、芥川や菊池寛との交流もあった。後年は少女小説にも手を染めた。創作集に『修道院の秋』が、随筆集に『過ぎ行く日』がある。（人名解説索引「南部修太郎」（1997・6）『芥川龍之介全集』第十九巻、岩波書店。）

[22] 南部修太郎、前掲載月報。

依つて一夜にケロリと治つてしまふ」とまとめているが、そこで触れられているのは明らかに第二章までの内容でしかない。つまり、南部は第二章までしか「南京の基督」を読み解いていなかったのである。要するに、南部の言う「Fiction」とは、〈金花の（奇蹟の）話〉だけに限られていたのである。しかし、「南京の基督」の「話」はここで終わっているわけではない。

> 翌年の春の或夜、宋金花を訪れた、若い日本の旅行家は再うす暗いランプの下に、彼女と卓を挟んでゐた。（第三章の冒頭）

〈時〉は、「奇蹟」が起きた数ヶ月後の「翌年の春の或夜」に移り、金花の部屋に訪れているのは、第一章でも登場していた「若い日本の旅行家」だった。およそ一年前に「金花の部屋」を訪れ、金花に「翡翠の耳環」を送ったその「若い日本の旅行家」は、一年前同様、また信仰の話題でもって金花を冷やかそうとするが、「晴れ晴れと、糸切歯の見える笑をもらし」て答えていた一年前とは異なり、この〈時〉の金花は「急に真面目になつて」、例の「不思議な話」、即ち第二章までの〈金花の（奇蹟）の話〉を聞かせるのだった。金花にとって、基督はもはや遠い存在ではなくなったがため、それに関わる「話」をする上でも敬虔さを疎かにすることはできなかったのだろう。しかし、「一夜南京に降つた基督が、彼女の病を癒したと云ふ」金花の「不思議な話」を聞きながら、「若い日本の旅行家」は、

> 「おれはその外国人を知つてゐる。あいつは日本人と亜米利加人との混血児だ。名前は確か George Murry とか云つたつけ。あいつはおれの知り合ひの路透電報局の通信員に、基督教を信じてゐる、南京の私窩子を一晩買つて、その女がすやすや眠つてゐる間に、そつと逃げて来たと云ふ話を得意らしく話したさうだ。おれがこの前に来た時には、丁度あいつもおれと同じ上海のホテルに泊つてゐたから、顔だけは今でも覚えてゐる。何でもやはり英字新聞の通信員だと称してゐたが、男振りに似合はない、人の悪る

さうな人間だつた。あいつがその後悪性な梅毒から、とうとう発狂してしまつたのは、事によるとこの女の病気が伝染したのかも知れない。しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」

と自問し、〈金花の（奇蹟の）話〉を覆していくのである。全集の1頁ちょっとしかないこの第三章で、〈金花の（奇蹟の）話〉はまた完全に異なるもう一つの「話」へと変貌する。第二章までの〈金花の（奇蹟の）話〉をその外側から覆すという「着想」[23]は、芥川の創作ノートに「クリスト売春婦の梅毒を癒す。―売春婦自身の話。」というメモが残されていたことから、創作当時すでに想定されていたと推測することができる。メモの内容から察するに、〈金花の（奇蹟の）話〉を「売春婦自身の話」にするには、「売春婦（私窩子）」である金花「自身」に〈金花の（奇蹟の）話〉を語らせるとともに、その「話」の聞き手となる存在が必須だった。その意味で「若い日本の旅行家」はこの作品には必要不可欠な存在だったと言えよう。しかし、同時代評で

南京の私窩子の金花が、雑種の遊蕩児の顔が十字架の基督の像に似てた為に、この雑種児によつて肉の歓楽と法悦と合せ得たといふ心境、この可憐の私娼を欺いた蕩児が女の病を貰つて女は救はれ男は狂疾と迄なつたといふ運命の悪戯は共に興味のあるテマではあるが、（下略）。（安倍）

と、（傍線部分で）まとめられているように、〈金花の（奇蹟の）話〉は「売春婦（金花）自身の話」へと相対化されるが、その相対化された「話」がそのまま受容されることはなく、「若い日本の旅行家」によって「曝露」された内容に置き換えられて受けとめられているのだった。「若い日本の旅行家」の存在は問題とされず、その自問台

[23] 宮坂覺の論（前掲載論）で使用された「着想」という言葉を借用。

詞にある前半の曝露部分だけが「南京の基督」全体の「話」における最優位の〈真実〉として受容され、芥川の南部宛書簡が公表されるまで、後半部分の「真理を告げ得ない心もち」[24]は看過されていたのである。

南部修太郎は、その月評[25]で次のような考えを示している。

> 結末に近くその西洋人を「日本人と亜米利加人との混血児で、名前はGeorge Murryとか云つた」などゝ、厭やに現実がゝつた添書を加へたのは、Fiction らしい幻想を破つてしまふので無用だと思ふ（下略）

金花の語る「不思議な話」を「Fictionらしい幻想」と見なし、〈「或秋の夜半」の出来事〉の発端となった外国人が「無頼な混血児」だと明かす必要はなく、それはむしろ「話」を台無しにするのだと南部は指摘している。つまり、「売春婦（金花）自身の話」へと相対化するために「厭に現実がゝた」聞き手を設けるよりも、まだ相対化されていない「売春婦（金花）の（奇蹟の）話」を「Fiction らしい幻想」のままにするべきだと主張しているのである。幸いにも、この部分に対して、芥川は真っ正面から向き合っていた。

> あの日本の旅行家が金花に真理を告げ得ない心もちは何故遊びに堕してゐるか僕等作家が人生からOdious truthを掴んだ場合その曝露に躊躇する気もちはあの日本の旅行家が悩んでゐる心もちと同じではないか君自身さう云ふ心もちを感じる程残酷な人生に対した事はないのか君自身無数の金花たちを君の周囲に見た覚えはないのかさうして彼等の幻を破る事が反つて彼等を不幸にする苦痛を嘗めた事はないのか（下略）（波線筆者）

芥川の生の声として提示された「Odious truth」とその「曝露」の問題は、図らずも「南京の基督」の〈読み〉を大きく左右し、今日「南京の基督」研究に携わるにあたり、無視することの出来ぬ貴

[24] 芥川の南部修太郎宛書簡（1920/7/15）より抜粋。
[25] 月報「最近の創作を読む」(「東京日日新聞」、1920/7/11)。

重な資料となるが、〈金花の（奇蹟の）話〉を「売春婦（金花）自身の話」として金花に語らせ、さらには「日本の旅行家」によって相対化されなければならない理由が波線部分の「あの日本の旅行家が金花の真理を告げ得ない心持ち」を表わすための工夫だったということが明かされでる。

しかし、芥川の創作意図が表明されたからと言って、唯単に、南部が「南京の基督」から芥川の作意を汲み取れなかったと、単純に月評と書簡の間で交わされた論争に決着をつけることはできない。南部の見方が南部一人でなく、言葉や表現は違えども、同時代評の共通する傾向であったことも事実だからである。たとえ「若い日本の旅行家」を中心とする第三章をも視野に入れて、相対化した「話」を受容したとしても、南部と同じく、芥川の訴える「日本の旅行家」の「心もち」を汲み取っている〈読み〉は一切見受けられなかった[26]。このような同時代評に見られる作品の受容のあり方と、芥川の作意との間のズレについて、「創作ノートに認められていた「〇クリスト売春婦の梅毒を癒す―売春婦自身の話」という着想と、創作過程の中で結実されていった Odious truth 曝露のテーマが、「南京の基督」で完全合体されえなかったのではなかろうか。」[27]という宮坂覺の指摘は的を射ているように思われる。しかし、論者はむしろ、テーマの表現のために駆使したテクストの構造にこそ、作者と読者の間のズレを生じさせた要因が隠されているのではないかと考える。

〈金花の（奇蹟の）話〉を「売春婦（金花）自身の話」へと相対化する上で、金花は語られる存在から語る側へと転移する。そして、その語られた「話」は「南京の基督」の新たな主体となった「若い日本の旅行家」の「曝露」という行為によって更に〈「Odious truth」

[26] 「興味あるテマではあるが、作者は必ずしもこのテマに力を集中するわけでもなく、唯これに私窩子社会の迷信や、金花の夢や日本の若い旅行家を絡ませたり、作者の漢文の素養や通を利用して美しく物語を織成したに過ぎない、事件としても又主人公の金花の心持から見ても、この作は決して強い真実性を持つたものではない。」（安倍能成）。「何だか御噺の単なる筋書き見たやう」（原田實）。

[27] 宮坂覺、p31-32、前掲載論。

の話〉へと変移するのである。つまり、芥川は、主体を移転することによって、宮坂の言う「着想」と「テーマ」の完全合体を果していたのである。しかし、本来は主体が金花から「若い日本の旅行家」へと転換するに基づいて、相対化された「売春婦（金花）自身の話」が〈「Odious truth」の話〉へと「話」の位相を変えていくべきなのだが、実際は主体の異なる二つの相対化された「話」を両立させてしまったのである。金花が「たとえ真実を知ったとしても、恐らくは奇蹟を、〈基督様〉を信じて止ま」ず、誰だろうと「金花の夢は破ることができない」[28]という見方が支持されるのも、相対化されたにも関わらず、その主軸をなしている、金花を主体とした「金花の（奇蹟の）話」の枠組みに変わりはなく、そのままの形で受容されるからだと見ることもできよう。推し進めると、同時代評が、外国人の正体を「曝露」した第三章を視野に入れても、なお芥川が目論んでいた「Odious truth を掴んだ場合その曝露に躊躇する気もち」を読み取れなかったのも、主体を「若い日本の旅行家」へと移して相対化された「話」を置き換えられなかったからではないかと考える。「この作は決して強い真実性を持つたものではない。しかも亦一個独立の小世界を創造したメールヘンでもない。両者の間に彷徨して何れにも落著けない作品の様に私には思へる。」（安倍）と同時代評で指摘されているように、「メールヘン」と見なされがちな金花の「不思議な話」から、「日本の旅行家」の「曝露」によって成り立つ「現実」または「真実」の「話」へと、完全に「話」の位相を転移させて受容することは難しく、かえって読者を「両者の間に彷徨」させ、「何れにも落著」かせなくさせてしまったのではないだろうか。宮坂の指摘する「着想」と「テーマ」が「完全合体されえなかった」のも、主体の転換に伴う「話」の位相の推移に大きな要因があったと思われる。

また、南部修太郎宛の二通目の書簡[29]で、芥川は一通目の「曝露

[28] 高橋龍夫、p67-68、前掲載論。
[29] 南部修太郎の「南京の基督」評（1920/7/11）に対して芥川が認めた一通目の

に躊躇する気もち」についてより一歩踏み込んだ説明と例を次のように挙げている。

> George Murry を点出しなくとも売笑婦の信仰を憐んでゐる作者の態度は通じるかも知れんしかし憐みながらそのイリユウジヨンを破らうか止さうかとためらつてゐる心もちは通じない云ひかへれば憐んでゐるよりも一歩先の心もちは通じないこれは自明過ぎる程自明の理だ（通じさせなくとも好いと云へば議論にならぬそれは個人的の好みの差だから）たとへば「憐むべき彼はパンを石と思へり」[30]と云ふとする成程その時作者が彼を憐んでゐる心は通じるだらうしかしそれだけの文句では「予は彼にその石なる事を告げんか否かに躊躇せり」と云ふ心もちは通じないと思ふ通じたらその読者は千里眼だ君にはこれが自明の理とは思へないか

「若い日本の旅行家」を設けて外国人の正体を明かさなくとも、「金花（の信仰）を憐んでゐ」る「作者の態度」は通じるかもしれないが、「憐みながら」真相を暴露するかどうかと「ためらつてゐる心もち」は通じないと芥川は改めて「南京の基督」に籠めた真の「テーマ」である作意を明らかにする。しかし、芥川の言う「憐みながらそのイリユウジヨンを破らうか止さうかとためらつてゐる心もち」は、

> 「しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」（第三章）

書簡（7/15）の翌日（7/16 と予測）には、現存しないが南部からの返事があったようである。芥川の二通目の南部宛書簡は、その返事に対して 7/17 に書いたものである。

[30] 「憐むべき彼は石をパンと思へり」の誤りだと思われるが、ここでは、『芥川龍之介全集』に掲載されたままの文面を載せた。

と、テクストの第一章では三人称の立場だった「若い日本の旅行家」を（心内話という形ではあるが）一人称にすることによって実現していたのである。芥川の言う「曝露に躊躇する気もち」がそのままの言葉でもって、読者に向かって伝えられるわけだが、秦淮に「物好きな一夜を明かし」にきた「日本の旅行家」が本当に一人の「私窩子」のために「曝露に躊躇」するだろうかというような「日本の旅行家」に主体性をもたせた上での問題意識が派生しやすく、読者が「日本の旅行家」と自分を重ねてその一人称の「おれ」で語られた「気もち」を体感することはむしろ困難のように思われる。「若い日本の旅行家」を主体として、その「曝露に躊躇する気もち」を察知させるには、外側から「若い日本の旅行家」に向けられた眼差しが必要不可欠なはずである。

その担い役において、真っ先に思いつくのは語り手なのだ、「南京の基督」の語り手は、偶に主観的な表現を口走るものの、努めて客観的立場を一貫して保てていると言える。「若い日本の旅行家」を「南京の基督」という大きな「話」の枠組みの内部へと取り囲んでいけるのは、率直に言うと、作者しか残されていない。ところが、「南京の基督」のテクスト内部で、作者の姿を見ることは殆どできないのである。

作中における客観的立場の語り手に、作者・芥川の姿を伺わせている素振りは見当たらない。また、実生活において、中国旅行の話は早々と企画に入っていたものの、作中の「若い日本の旅行家」に安易に芥川を重ねることもできまい。しかし、実際はというと、「南京の基督」の中にはすでに作者・芥川がその実体を伴って、誰もが目のつく場所に配置されていたのである。

それは、作品の最後に付け足された「附記」である。

五、結末と「附記」をめぐって：

「南京の基督」のテクスト内で唯一作者・芥川を直に見ることが

できるのは、最後に付け足された「本篇を草するに当り、谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」[31]に負ふ所尠からず。附記して感謝の意を表す。」という内容の「附記」である。そして、その「附記」について周到な考察をした鷺只雄[32]は、まず「南京の基督」が谷崎潤一郎の「秦淮の夜」から借用したのは、部屋の中の描写のみだと指摘する[33]。そして、芥川が「附記」を添加した真意を志賀直哉の「小僧の神様」(「白樺」、大正九年一月)に見るのである。

「南京の基督」が執筆されたのと時を同じくして、芥川は次の書評を書いていた。

> 志賀直哉氏の「小僧の神様」を面白く読んだ。あの小説には作者の附記がついてゐる。しかし附記は単に附記ではない。小説その物の一部として、立派な成功を収めてゐる。ロダンなぞの彫刻に、大きな大理石のブロックへ半分人間を彫つたのがある。志賀氏のこの手法は、あの未完成に似た完成を彷彿させる趣がある。内容も新しい、技巧も新しい。推奨するに足りると思ふ。[34]

鷺は、「南京の基督」が志賀直哉の「「小僧の神様」の〈新しい技巧〉に学び、それを芥川風に応用して創りあげ」た作品で、第「三章における無頼漢の〈曝露〉は、現代の物語としてのリアリティを保証し、論理的な整合性を企図したもの」だと最後に記された「附記」に著眼して解いている。確かに、「南京の基督」における〈奇蹟〉の真相の「曝露」に対する「躊躇」という発想は、志賀直哉の「小

---

[31] 芥川の誤記。前半は「秦淮の夜」の題で大正八年二月「中外」に、後半は「南京希望街」の題で大正八年三月「新小説」に発表される。

[32] 鷺只雄(1983・8)「「南京の基督」新攷—芥川龍之介と志賀直哉」、「文学」51、p50-62、岩波書店。

[33] 「いっさいは部屋の中で始まり、部屋の中で終わる」(鷺)と指摘されているように、すべてが「金花の部屋」の中だけで展開している「南京の基督」にとって、「秦淮の夜」で述べられている中国の情報は何の意味もなさない。娼婦の人物設定は猶更である。官能的な「秦淮の夜」の娼婦たちに対し、「南京の基督」の私窩子・金花は対照的に気立ての良さと信仰の敬虔さが強調されている。(筆者注)

[34] 芥川龍之介「大正九年度文壇上半期決算」(1920・7)、「秀才文壇」。

僧の神様」の最終章とその〈附記〉[35]に大きな影響があったと思われるが、果して「リアリティを保証し、論理的な整合性を企図」する為にだけ、同じ南京の秦淮を舞台とした谷崎の「秦淮の夜」は持ち出されたのだろうか。先の「小僧の神様」評にあるように、芥川はこの時期、確かに結末における結び方に拘っていた。ならば、「秦淮の夜」の結末にも着目していたはずではないだろうか。

重要な場面だと思われる、下の谷崎「秦淮の夜」の結末の一部を見てみたい。

> 一言半句も支那語を解することの出来ない私は、其の可憐なる媚びに對して、報ゆる術を知らないのが悲しかつた。
> 「花月樓（ホワイエーロー）、花月樓」
> と、私は纔かに彼女の名前を支那音で呼び續けつゝ、両手の間に細長い顔を抱き挟んだ。挟んで見ると掌の中にすつぽり隠れてしまふほどな小さな愛らしい顔であつた。力を籠めてぎゆつと壓したらば、壊れてしまひさうな柔かな骨組であつた。大人のやうに整つた、赤児のやうに生々しい目鼻立ちであると私は思つた。私は急に、挟んだ顔をいつまでも放したくないやうな、激しい情緒の胸に突き上げて来るのを覺えた。

谷崎の「秦淮の夜」は、「私小説ふうな展開」[36]の紀行文なので、作中の「私」の「胸に突き上げて來」た「激しい情緒」はそのまま、作者・谷崎のものとして読者に受け止められることだろう。そこで描かれる「情緒」はまさに読者の「心にアッピイルする」（南部）が

---

[35] 「南京の基督」の「附記」に対して、「小僧の神様」のは山括弧〈附記〉で区別する。志賀直哉はその〈附記〉で「当初小僧が客の本体を確かめようと所書を訪ねると、そこには稲荷の祠があってビックリしたと書く予定であったが、それでは「小僧に少し惨酷」なので擱筆した」（鷺）と明かしている。

[36] 「谷崎は大正七年十月上旬から十二月上旬までの二か月間、朝鮮、満州を経て中国旅行を楽しんだ。「秦淮の夜」はその旅の紀行文で、端的に言えば秦淮河岸での遊廓見聞記であり、美女探しである。迷宮のような街路、電気を使わない暗さ、閨房の貧弱さ、万一殺されてもわからないような不安、望みの美女を求めて妓館を経めぐる妖しい戦慄等々―紀行だが、私小説ふうな展開で、読者を妖しい耽美と好奇の世界に誘うエキゾティックな作品である。」（鷺）

如く、作者の「情緒」が「何物かの為めに、(中略) 沮害され」(久米) ることなく描かれている。しかし、谷崎の「秦淮の夜」と芥川の「南京の基督」とでは、「紀行文」と「Fiction (南部) ／メルヘン (久米)」の違いはあれども、両作とも、それぞれの売春婦「花月樓」と「金花」に対する「憐れみ (憐憫)」の情を扱っている。秦淮を旅する日本人の「旅行家」が秦淮の売春婦に向ける「憐れみ (憐憫)」の感情を共通としていることからも、芥川が唯単に秦淮の情景を描写する為だけに谷崎の「秦淮の夜」を借用したのだと片付けることもできまい。

志賀直哉が「小僧に少し惨酷」だと思ったのは、「何時かは又「あの客」が思はぬ恵みを持つて自分の前へ現はれて来る事を信じてゐ」(鷺) た希望を閉ざしてしまうからか、また、小僧に (「南京の基督」が「昔の西洋の伝説のやうな夢」なのに対して「お稲荷様」を思わせる「小僧の神様」の) 東洋的な〈奇蹟〉に「夢を見させて置く」べきだとしているのかは定かではないが、芥川は志賀直哉の言う「惨酷」とその〈附記〉にしか記し得なかった「躊躇」を「南京の基督」の「テエマ」にするのである。そして、その「テエマ」を谷崎の「秦淮の夜」にある結び方とは対照的な形で、芥川は表現を試みたのではないだろうか。

「南京の基督」で駆使された技巧と工夫は「遊びが過ぎる」と評した南部に、芥川は最初の書簡で「真面目になると云ふ事は作品中の人物に真面目な事を云はせるのみではない」と最後のところで反論している。谷崎を名指しての指摘ではないにしろ、作中の人物である「私」が売春婦の「花月樓」に対する「激しい情緒」を「真面目に」述べている谷崎の「秦淮の夜」の結末とは対照的に、芥川は、金花を憐みながらも、「Odious truth」の「曝露」をめぐる「躊躇」を「若い日本の旅行家」の冷静な額ぶちに収め、不「真面目」に「わざと熱心さう」に金花に「お前は、その後一度も煩はないかい」と尋ねさせるのだった。谷崎「秦淮の夜」の「私」が、花月樓の「細長い顔を抱き挟んだ」まま、胸に突き上げてきた「激しい情緒」を

「花月樓、花月樓」と名前に託して、「私」の口から放出することで表現しているのに対し、芥川の「日本の旅行家」は、「おれ」の内部に金花の「仕合せ」を巡る「躊躇」を伴わせた静かな「憐れみ（憐憫）」を仕舞い込んでいる。つまり、谷崎の「秦淮の夜」が「私」の内部から「話」の外部にいる読者に向けて訴えているのとは逆に、芥川の「南京の基督」は、「話」の外部にいる読者が「日本の旅行家」の心の内部をのぞき込むという作品の外からの眼差しを実際に読者に求めていたのである。このように、全体を振り返ると、外部から「話」を内部へと取り込んでその位相を転換していくという「南京の基督」の構造は、「附記」も含めて、一貫していたことが析出できよう。

六、まとめにかえて：

まず、第一章の前半は、「話」の主人公となる金花像の構築に、語られている〈現在〉である時空の外部から、語り手による「金花の行状」の良さが幼少から持ち続けた「羅馬加特力教の信仰」にあるという説明、「今年の春」に「若い日本の旅行家」との間で交わした基督信仰のやりとり、そして、「彼是一月ばかり前」に梅毒に罹った後における金花の「決心」が持ち出されていた。実際、第一章が語られている〈現在〉の時空である「或秋の夜半」の「金花の部屋」で起きた出来事は、そこに訪れた「見慣れない外国人」と一夜をともにしたという一言に尽きる。前半における金花像が構築されていなければ、第一章で語られる〈「或秋の夜半」の出来事〉は出来事にさえ成り得なかっただろう。ただ、この時点における〈「或秋の夜半」の出来事〉は金花が「決心」を破り、客に病を移してしまい、自らも天国へ行く道を閉ざしてしまった示唆に留まるのである。

続く第二章は、「屋根の上にある星月夜へ、煙のやうに高高と昇つ」たところに置かれた金花の「夢」から始まる。「夢」の中で、金花は彼女の部屋を訪れた自称「耶蘇基督」の外国人に「卓の上」の豪華

な料理を「食べるとお前の病気が、今夜の内によくなる」と言われる。「夢」を所詮「夢」だと見なして目覚めた金花だったが、「彼女の體に起つた奇蹟」に「夢」の実現を認め、かの外国人を「基督様」だと確信するのである。この第二章の展開によって、第一章における〈「或秋の夜半」の出来事〉は、金花の「決心」の破綻で天国へ行けなくなったことから、「基督様」の訪れ、更には金花の梅毒を治癒した〈金花の（奇蹟の）話〉へと「話」の位相が転換するのである。しかし、芥川の本当の「着想」はそれを相対化することにあった。

第三章は、金花に〈金花の（奇蹟の）話〉を語らせることで、「売春婦（金花）自身の話」へと「話」を相対化し、同時にその「話」の聞き手となる「若い日本の旅行家」を配置することで、「話」の主体を金花から「日本の旅行家」へと推移させ、「売春婦（金花）自身の話」を「日本の旅行家」にとっての〈「Odious truth」の話〉へと転換させたのである。ここまでのテクスト構造の観点から、南部修太郎をはじめとする同時代評は、〈「Odious truth」の話〉に転換した「話」を金花の主体のまま受容したがため、芥川がその南部宛の書簡で明かした「若い日本の旅行家」の「曝露に躊躇する気もち」に辿り着けなかったのではないかと見る。しかし、芥川が目論んだ「日本の旅行家」の「曝露に躊躇する気もち」をさらに読者に感受させるには、「日本の旅行家」を主体として〈「Odious truth」の話〉を受容させるだけではなく、それら全てを包含した一つの「話」としてさらなる「話」の位相転換が必要だったのである。芥川の南部宛書簡が公表されてやっと、金花を中心とした〈「Odious truth」の話〉から「日本の旅行家」の立場に立ってその「気もち」が汲み取られるようになるが、それはあくまで書簡によってもたらされたもので、テクストの〈読み〉によるものではない。そこで、「日本の旅行家」の「曝露に躊躇する気もち」を一つの「話」へと変えるには、それを眼差す外からの視線が必須ではないかと考えた。それが可能なのは作者しかいない。作中で唯一その存在を確認できるのは「附記」だった。そこで論者は、当時の芥川が志賀直哉の「小僧の神様」

に触発されて「附記」に強い関心をもち、実際に中国の地を踏んだ谷崎の「秦淮の夜」を意識していたことをもとに、芥川が実際に「南京の基督」の「附記」をも駆使して、「日本の旅行家」を主体とした〈「Odious truth」の話〉を外部から囲み込んで「話」の位相転換を図っていたのではないかと類推した。ただ、その部分における芥川の目論見は的が外れたようである。「附記」はあくまで附記としてしか受止められず、テクストの複雑な構造に込められた芥川の意図が十全…芥川の意図が十全に伝わっていなかったことに、同時代評が「日本の旅行家」の「曝露に躊躇する気もち」まで汲み取れなかった、大きな所以を見るのである。

最後に、改めて言及するまでもなく、芥川の生の声と見なされる二通の書簡の存在は大きな影響力でもって「南京の基督」の〈読み〉を今日まで導いてきた。作者の明かした作意や「テエマ」で作品を受容することが最も適切な〈読み〉なのかもしれないが、肝心の芥川に書簡を認めさせた南部の月評に焦点を当てようとする論は近年殆ど見ることがない。芥川の「作品のテエマを理解しない」[37]という一言で片付けられてしまいがちだが、その程度の月評なら、無視されたのではないだろうか。南部修太郎が芥川と親しかっただけに、月評の内容はひどく芥川を傷つけたという見方が多いが、論者はむしろ南部修太郎が芥川の痛いところを突いてしまったのではないかと考える。南部一人ならともかく、言葉や表現の違いはあれども、実質、同時代評は共通して「南京の基督」を「曝露」された内容で「売春婦（金花）自身の話」を覆した〈「Odious truth」の話〉として受容するものの、「若い日本の旅行家」の「気もち」までは〈読み〉取っていなかったことも事実である。その意味で、親しかったからこそ、芥川は「南京の基督」の同時代評に対する反撃を南部一人に向けて本心でもって応酬したのかもしれない。

[37] 芥川の南部修太郎に宛てた最初の書簡にて。